

鬼たちの声

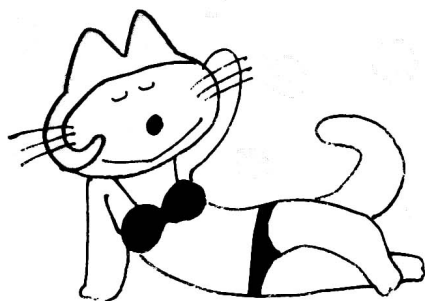
田辺聖子



文藝春秋

鬼  
たち

辺聖子



# 鬼たちの声

昭和四十九年九月三十日 第一刷

著 者 田辺聖子

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋 東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 大日本印刷

製本所 矢嶋製本

© 1974 Seiko Tanabe Printed in Japan  
万一落丁乱丁がありましたらお取りかえいたします

## 目次

|          |     |
|----------|-----|
| 鬼たちの声    | 5   |
| 山家鳥虫歌    | 55  |
| 花の主婦連    | 87  |
| 男ともだち    | 117 |
| 喪服記      | 179 |
| 容色       | 209 |
| 鬼と夕顔     | 231 |
| 花婿読本     | 265 |
| とうちやんと争議 | 295 |



# 鬼 た ち の 声

装幀

馬場のぼる

# 鬼たちの声

夏のある朝、夢野町という兵庫県の小さい田舎まちの路上で、中年男の変死体が発見された。

何しろ、この辺りときたら過去十年間に、殺傷事件がたった三件あったきり、しかもそのどれもが解決済みという平和な町で、ふってわいたような怪事件だ。町じゅうがその話でもちきりになったのはむりもないのである。

いったい、この夢野町は、つい先ごろまでは、兵庫県夢野郡夢野村大字夢野といった。村人は半農半商、給料生活者も多く、中にはその三つを兼帯している家もあるが、何せ交通の便が悪いので、まだ阪神間のベッドタウンというほどひらけてはいない。なだらかな六甲山脈と、けわしい北摂山系に三方をかこまれた、まわりはいちめんの田畑という、空気の美味しい物静かな集落である。

現場は、部落のやや東よりを流れる夢野川に沿った旧国道筋で、このへんは町なかでもにぎやか

な場所である。(夢野川をさかのぼると桜の名所の水源地に出るので、春には夢野川の堤防に赤いボンボリが立てられる。)

バス停留所の前にお好み焼屋「おもろ亭」があつて、この主人がセンサーショナルな事件の第一発見者であるが、彼は極端に無口である。それで、そのいきさつを逐一しゃべったのは、すべて彼のスポークスマンたるオバハン(女房)である。

刑事が、発見したとき死体の着衣には手をふれなかつたか、とたしかめると、

「へえ、頭を、いろうた(さわった)だけだす、なア、あんた」

とオバハンはおもろ亭をふり返った。小山のように巨大な体軀のおもろ亭は、横をむいてあるかなきかにうなずいた。

「なんせ、着したアるものボタンみんなかけ忘れてまんねさかい。なア、あんた」

とオバハンはまだ主人をふり返った。

「わしゃア、オッサンにきいとるのや」と刑事はオバハンをたしなめてから、おもろ亭にむかつて、  
「たしかに靴はなかつたんやね」

「なかつたなあ」

おもろ亭は重い口をやつとひらいたが、それは刑事に答えたのではなくてオバハンに横をむいて  
いったのである。オバハンひきとつて、

「へえ、たしかにはだします。ズボンのボタンもはずれてワイシャツは手通しただけやし、サルマタは裏むけにはかしたずるし、……なア、あんた」

オバハンはまだ昂奮がさめきっていないようにみうけられた。おもしろ亭は大変なことのかかわりあいになったのが辛そうな表情で、ますます太い猪首をちぢめてかすかにうなずいた。

つまり、こういう事件である。おもしろ亭ではお好み焼のほか、店先でパンや牛乳も売っているのですがその配達がくるから朝は早い。その朝、いつものように五時半ごろに主人が表のガラス戸の白いカーテンをひきしぼって、ガラガラ戸をあけてみると、向いの水道工事屋の空地においたオート三輪の下から、男の足がみえた。

（また、あんなところに酔っ払いがねていよる）

とおもしろ亭は舌打ちした。

昨夜からの雨にひきつづいて今朝もしよぼしよぼしているので、雨にぬれない算段をしてこの下へもぐりこんだものらしい。大の字にぶっ倒れているようだ。はき物は脱げてどこへ飛んだのか、泥だらけの靴下の爪先が二つ、上を向いてほそい雨にぬれている。

オート三輪のシートには雨のしずくがたまっていた。この車は水道屋のものである。

おもしろ亭は太っているのであんまり早く身動きできない。牛乳やコーラの空瓶の箱を片づけて狭い店内を動きやすくしてから、ゆっくりとガニマタを開いて道を横切り、車のそばへいった。しばらく

くつつ立って見下していたが、男はよほど泥酔してふかくねむりこんでいるのか、寝息もきこえない。おもろ亭はビニールの突っかけをはいた足さきで、チョイチョイ、と男のつま先をつついて、「あんた、もしー」といつてみた。

それでも起きないので、身をかがめてズボンごと二本の足をずるずるひっぱった。

重い感じで、男の体が車の下からひき出されてきた。見たようなおぼえのある中年男であるが、だらしなくワイシャツをズボンからはみ出して正体もないほど深く寝入っている。

「あんた、起きんかいなー」

おもろ亭はちよつと力を入れ、男の肩をゆすぶった。男はびくともしない。

「え、あんた！」

おもろ亭が妙な予感を感じたのはそのときであった。その予感よりあとだったか先だったか――男の体を抱きおこそうとすると、首すじがひやりとしてつめたく、頭がぐらりと傾いた。

（たはー）

死んでるぞ。とおもろ亭はびっくりして手を放した。と、男の頭がぐにゃつと片方の肩へかしいで、死体はまるでふざけて思い出し笑いするような恰好になった。

おもろ亭は色を失ってがくがくしながら店へとって返し、オバハンを叩きおこし、駐在へはしらせ、大さわぎになった。市の警察署から刑事の一団が、ねむりもさめやらぬこの未明の部落へどや

どやとなだれこんできた。

おもしろ亭とオバハンは、発見者は語るといので、早速、氣負った顔で新聞社に写真をとられた。男の身許はすぐ割れた。集まってきた弥次馬は被害者を知っていた。おもしろ亭のオバハンも、さつきは動顛していて分らなかったが、この男はこの町はずれを通っている国鉄の踏切の番人で、去年の正月、うちでお好み焼を三枚食べたことがある、と証言した。

それにしてもふしぎな死体である。外傷はない。しかも雨に打たれるホトケの顔は、オバハンの表現によれば「極楽往生」というようなおだやかな表情である。そのくせ、他殺か事故死か、どちらにせよ、服の乱雑さや、はだしでいるのはどういうわけだろう。よくみると、上衣はたんでカバンと一しょにそばにおいてあった。死後、どこからか運んできたのではなからうか。

そのうち、連絡がついて、被害者の細君がかけつけてきた。彼女は変り果てた夫の姿を一ト目みるなり、情が激してきてワツと泣き出したが、泣き出しながら、何かいった。が、わあわあときこえるばかりで、さっぱりわからない。「何や」と刑事がきくと、細君は息を切らしながら、

「あ、この女がわるいのです。みんな、あの女です。宅をこないしたのは、きつとあの女です」

「あの女とは誰やね」ときくと、「あの女いうたらあの女や、わからへんのか、ぼんくらー」と刑事にかみついた。これも夫の悲劇に動顛したというより、もっと大きな腹立ちで氣違いのようになっているのだろう。「私や、よう知ってるのや、宅があの女にだまされてるのや、ええ年して……」

……とはげしく泣きわめき、昂奮して手がつけられない。「あの女が怪しいですわ」ととぎれとぎれにいうのであった。

「変死者は、踏切警手、高岡新吉、四十五歳……」と新聞記者たちが手帳にかきこんでいるところ、年のいった刑事の一人がふしぎな発見をしていた。

数人が手わけして、被害者の靴をさがしているうちに、死体が押しこまれていた車の下の地面からずつとどこかへつづいている、何か重いものを引きずったような跡がある、それをみつけた。今まではまだ暗かったので気付かなかったのだ。雨が上って、あたりは明るくなりはじめていたので、それはキズアトのようにながなと、どこへもしれず延びているのがわかった。

たどってゆくと、百米ばかりはずれた国道すじ向いの、ちよつと小路を入った家の納屋まで、それはつづいていた。その家の標札は、半沢源一郎とあがっていた。

彼がかがみこんで地面をしらべていると、表戸が鳴った。刑事はにつこりして顔をあげ、

「お早うさん」

というと、あわてたように表戸をあけた女が、「お早うございます」と挨拶して、

「ご苦労さんでございますなあ」

と、夜明けからの騒ぎも知っているらしい口ぶりである。

「奥さん、これは何かいね。心当りはないかいね」

刑事がにこにこして、地面の例のあとを指すと、女はちょっと考えるふりをしていたが、すぐ笑った、「ああそれは昨日、子供がタキギでつけたあとですわ」

刑事はそういわれても地面の跡からじっと目をあげなかった。突然また、いつそうににこにこして、「奥さん、これは何かいね」と飛躍して、こんどは納屋の入口の柱についた、新しいささくれ傷をさした。それは何か、幅のひろいものが入口を通っていったときについたらしく、あざやかな色の切りキズが、古い木肌についていた。

「さあ、何でしょうか？」

細君は目をこらすようにして首をふった。刑事は納戸をのぞいて、ますます優しい調子になった。

「奥さん、あの乳母車はあんたとこのかね」

「そうですけど」

「最近使ったかね」

「いいえ……」

「しかし湿った黒い土がタイヤについておるようやなあ」

「よう知りませんが、昨日、子供がいたずらでも……」

「うん、子供がねえ……」

刑事はうなずいた。彼はひどく優しかった。

だが、午後になってやって来た若手の刑事の一人は仕事が早くて峻烈だった。嵐のように、家中をひっかきまわした。

「半沢モエ子さんやね？」

その中の、髪と眉の黒々した青年がじっとモエ子を見つめていった。

「はい、そうですが……」

モエ子は三十六七で、なかなか風情ふうせいのある哀切なかすれ声である。顔立も、声にふさわしく、ちよっと男好きのする丸ぼちゃの、目のぱっちりした愛嬌のいい女であるが、いま、その眼は、若い刑事の右手に無造作にさげられたものに向って、空洞のように暗くみひらかれていた。

「出て来たよ」

「……」

「こりゃ、旦那さんの半沢源一郎氏の靴じゃないね」

「……」

「ミシンの椅子の下にあったよ」

「ミシンの……椅子の下……」

「あのホトケさんの靴だけがなんで、あんたのうちにあるのかねえ？……え？……」

「あかし、知りません、あの……」

「来てもらってゆっくり説明してもらおう」

“任意同行”でつれていかれると、解剖結果が出ていた。死因は脳溢血か心臓マヒか、はっきりしたことはまだわからぬが、とにかく急性死にはちがいない。その急性死の人間の靴が家内にあったのが、命とりになった。

靴がどこにあるか、知らなかったとモエ子は申しのべた。

「いつも、あの人が来て、勝手に靴をかくして上ってたからです」

——高岡は何時ごろ来たのか。

「九時半ごろです。主人が出張するといってたんです」

——計画的だな。それからどうした。

「十二時にあの人がバツタリ倒れました。イビキをかいてるので、何となく不安になって……乳母車にのせて外へ連れていきました」

——捨てたんだな。

「捨てたんやありません。目がさめたら帰ってくれるやろうと思っただんです」

——そのまま死ぬとは思わなかったか。

「気がついてくれればよいと思いました。死ぬとは思わなかったんです」

——高岡との関係はいつからだ。